アクティブ・ラーニングによる地域連携の可能性

松　﨑　陽　子

はじめに

本学の 1 年次履修科目であるプレゼミナールと 2 年に履修するゼミナールは、原則として同じ担当教員のもと同一メンバーの学生が連続して学ぶシステムになっている。すなわち、18 カ月間の期間にわたっての学習を担当教員の創意工夫によって、如何様にも企画立案して実施できるという稀有な教育の機会となっている。短期大学においては 2 年間で 62 単位という制約がある中、長期間の学びの存在は非常に重要なものになる。

そこで、プレゼミナール、ゼミナールはアクティブ・ラーニングの形式を取り、学外活動に主眼を置いた。それは結果的に地域を見直す、地域との連携の可能性を示唆するものとなった。以下は、この 18 カ月の報告である。

１．小冊子の作成

1 年生後期より開始する「プレゼミナール」において、『短大生の視点で地域情報を発信する小冊子作成』をテーマに活動した。教員が 10 年間出版社に勤務して雑誌編集者として取材・執筆活動を行って来た経験から、小冊子作りが企画立案の力や、構成力を養うために多いに役立つ作業であると感じて来たためである。実際に、18 歳の感性で企画を立てることは、既存の商業誌には無い斬新な記事を作り出す可能性も秘めている。まず、自分達が通学している東金沢から金沢までのエリアで、興味ある取材対象を探し出すという作業からスタートした。20 名の学生が 5 つのグループに分かれて、それぞれのテーマを取材し、原稿にまとめるというプロセスを経て、さまざまな学びをした。

第一にグループワークで 1 つの記事を作り上げるまでに、チームワークや相互の連絡の重要性を認識し、作業が進行する中で信頼感の醸成などがなされて行った。次に、学外とのオフィシャルな接触を行うことが、学生達にとっては初めての体験であり、親や教師以外の大人（社会人）と対話するという経験は、かなり高いハードルであったようで、この体験から自分の成長を確信した学生も多かった。

取材対象が決まった段階で、「電話スクリプト」を用いて依頼の電話をかけるロールプレイを行った。5 つのグループのリーダーが、実際に取材の依頼（取材の主旨、掲載媒体の説明、掲載誌の送付予定日程など）を練習し、メンバーはそれをメモするなどして傾聴した。練習ではうまく話せても、本番では上がってしまい上手な説明が出来なかった、取材の前に質問項目をファックスで送れと言われたなど、想定外の返事にとまどう場合もあっ

たようだった。

各グループの取材対象は下記の通りである。

・＜特集＞石川県のパワースポットを訪ねる
・他大学の学食を訪問する
・気になる地域のお店
・教職員の青春時代
・書評

このうち、特集の取材先の一つである「聖域の岬」に関しては、ゼミの日帰り旅行のような形でほぼ全員が参加し、片道でも 3 時間かかる珠洲の金剛岬に出かけて、3 大パワースポットと言われるゆえんを取材、体感した。自分達の住む石川県にも、このような土地があることを目の当たりにして「郷土」について考えを新たにした学生もいて、このような企画がなければ石川県に住んでいても決して行こうとは思わなかっただろうという意見もあった。

この他、市内のパワースポットと言われる兼六園、貴船神社、金澤神社などを取材した。

◀ 聖域の岬とランプの宿。

「他大学の学食」取材では、金沢大学、金沢工業大学、北陸大学に協力をいただき、学食を訪れて、実際にメニューを試食するなどして来た。他大学を初めて訪れて、さまざまな意味で刺激になった模様である。

また、「気になるお店」では、大学のすぐ近くにあるカレーのお店、コーヒー豆の販売店から香林坊にある店舗まで、分担して取材をしている。1 人 1 店舗を担当したので、全員が電話でアポイントを取り、取材活動を行い、お礼状を書き郵送している。

以上が、学外での取材活動である。次に、学内での作業をしたグループは、「教職員の青春時代」の取材を行った。篠崎学長を始め、普段接することが無い大学の先生達（リンチ・ギャビン先生、曽我千春先生）や職員の中村恭子さんなどが快く取材に応じて下さり、若い頃の写真もお借りして掲載した。大人の人々にも自分達と同じ年齢の時代があり、その時にどんな思いでどんな行動を取っていたのかという話を実際に伺うことで、自分自身の

キャリアを考えるヒントになったのではないかと思われる。

書評のグループでは、自分が推薦する本、漫画、DVD などについてコラム程度の短い文章を書く作業になったが、原稿の書き直しは 4〜5 回におよび、「推敲する」ということの意味を実感したのではないだろうか。とくに、漫画と単行本の書評を担当した学生達は、誌面に本の表紙を掲載させてもらう許可を取るために、それぞれが東京の出版社に電話して小冊子の説明、企画意図の説明を行い、それを明文化してファックスで送信しなければならないケースもあり、ビジネスの一端を垣間見るという経験をしている。

以上、18 ページの薄い小冊子ではあるが、編集作業を通じて様々な体験をするというアクティブ・ラーニングの形式で学んだ半年間であった。

反省点としては、カラーコピーを利用しホチキスで綴じるという製本の方法を取ったために、小冊子の写真が明度の低すぎる仕上がりになってしまい効果が半減した点と、せっかく地域に飛び出して取材をしているのに、紙面や原稿内容にあまり反映できなかった点が上げられる。

◀ 製本は全員でホチキスでとじた。

２．高齢者への金融クイズ

2 年次のゼミナールも、引き続きアクティブ・ラーニング形式で行った。前期授業で金融の基礎知識を学び、夏休み中に県内の 2 か所の施設において、高齢者に対する金融教育として「金融クイズ」を実施した。

20 名の学生を下記のように複数のグループに分けて、作業をスタートした。

（第 1 班）協力施設を探し、交渉する。

（第 2 班）金融知識についてのアンケートを作成する

（第 3 班）出題する金融クイズを作成する

（第 4 班）実践記録を論文として作成する。

これらのチームが平行して作業を開始し、まず第 1 班が金沢市地域包括センターでの協力を取り付け、次いで白山市の社会福祉協議会からも快諾を得た。それぞれ、打ち合わせ

に赴き、高齢者の人数や当日の開催場所などの打ち合わせを行った。各担当者から具体的な質問や希望が提示され、担当学生はその都度、苦労しながらも相手に納得してもらう交渉術を身に付けて行った。

第 2 班は、クイズ作成に必要な参考文献を求めて、図書館で開催した「選書ツアー」に参加し、参考になる図書を購入し、いかに金融知識を学んでもらうかを念頭に高齢者向きの内容でクイズ問題を作成した。数十問の中から、最終的に 9 問に絞り込んだ。

第 3 班はクイズ問題の完成を待って、アンケートの作成に取り組んだ。高齢者が対象ということも考慮して、簡単に答えられる設問を 10 問にまとめた。

第 4 班は、ゼミナールの活動記録を論文にまとめ、日本銀行が主として大学生を対象に行っている「日銀グランプリ」に応募する目的で、過去に入賞した論文や、先行研究の論文などのリサーチのほか、金沢星稜大学市民土曜講座で北野友士先生の講演を聞くなどの活動を行った。

各グループごとの作業を行いながら、当日に使用する小道具（点数表、メダル、点数シール、○×の指示器など）は全員で作成した。

＜実施報告＞

第 1 回　2015 年 8 月 12 日　於：八田サロン（金沢市地域包括支援センター協力）
参 加 者：20 名（女性、60 代～80 代）
参加学生：10 名

第 2 回　2015 年 8 月 21 日　於：白山市高齢者サロン（白山市社会福祉協議会協力）
参 加 者：10 名（女性、70～80 代）
参加学生：9 名

＜実施内容＞（1 回目、2 回目とも同じ内容である）

金融クイズ：○×形式のクイズをパワーポイントで示し、出題（○か×かを 5 分間で考えてもらう）→採点→解説というプロセスを全 9 問繰り返し行った。

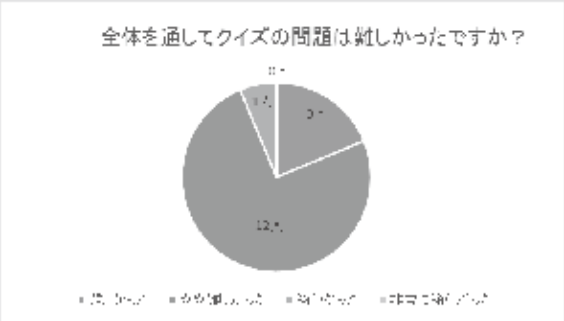
質問は下記の通りである。

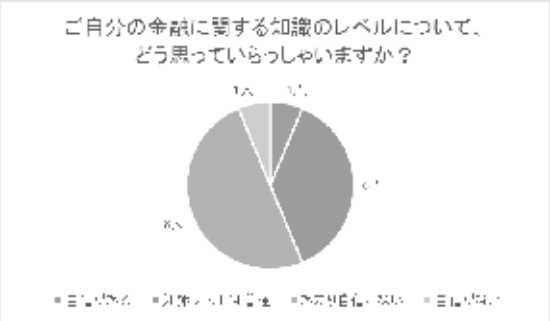
第 1 問　預貯金は「安全性・収益性・流動性」の 3 基準すべてに優れる金融商品である。
第 2 問　特殊詐欺（振り込め詐欺など）の被害総額は過去最悪を更新している。
第 3 問　金利が同じなら、単利よりも複利のほうが利子が多くなる。
第 4 問　銀行でも生命保険や損害保険を取り扱っている。
第 5 問　銀行の預金金利は、どの銀行でも同じである。
第 6 問　地震保険は単独では契約できず、火災保険とセットで契約する必要がある。
第 7 問　どのような債券でも、満期時には少なくとも購入金額と同じ金額が戻ってくる。
第 8 問　持家の人は、老後の生活設計上、住居費を勘案しなくても良い。
第 9 問　銀行預金について、預金保険で保護される金額の上限は元本 1,000 万円のみです。

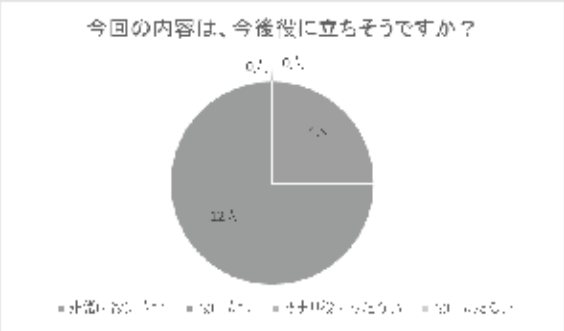
○運動もかねて、○と×の陣地に移動してもらい、正解者には「よく出来ましたシール」を渡し、ゴム紐で各自手首に付けた得点表に貼って貰った。
○全問終了後、最高得点者に金メダル、次点に銀メダル、第 3 位に銅メダルを授与した。
○最後に、簡単なアンケートに答えていただいた。

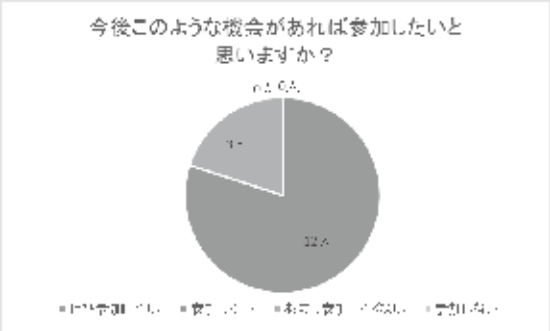
◀ 白山市役所にインターンシップに来ていた他大学の学生も参加した。

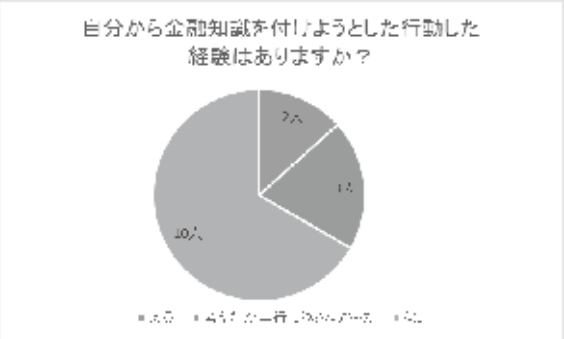
＜アンケートにみる参加者の感想＞

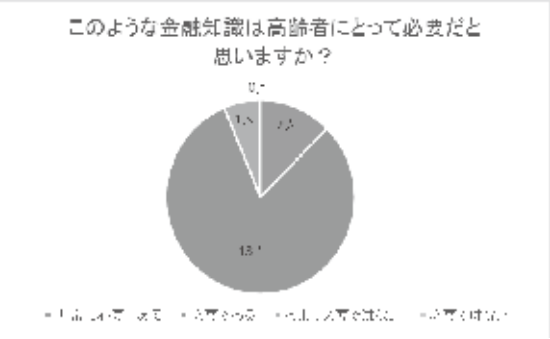












＜フリーアンサー＞

・とても勉強になった
・金融知識を身につけておくことで、長寿社会において何かの形で役に立つのではないか
・今まで必要がなかったので知識のなかったことにがっくりした
・何もわからない事に気付かせてもらってよかった
・これを機に勉強してみようと思う
・年がいくにつれてお金についての知識がなかなか入りにくいのでクイズ形式で楽しく理解できる会は大切だなと思う

※1 回目 20 名。2 回目 10 名計 30 名の参加者に、アンケート調査を行ったが、回答者数は 16 名。全問に答えていない場合もあるので、上記円グラフのような結果となった。
上記の活動を行った後の学生の反省点を以下に引用する。

＜今後の課題＞

今後の課題は多く、4 点が挙げられる。まず 1 つ目はクイズの問題である。難しいという意見が多く、途中から自分自身で考えずに人が多い方に動くというケースがあった。それを解消するためにも問題を易しくする必要がある。同時に高齢者にとってもっと興味の湧く問題にすることが大切である。「私たちは高齢者だから今更保険に入っても意味がないし、この問題も若い人向けかな」という声もあった。高齢者でも保険に加入しようというケースが増えていると聞いていたが、今回の地域と対象者にとっては「他人事」の問題になってしまった。ターゲットに向けて、相手目線になって考える必要性を痛感した。

2 つ目はパフォーマンスの工夫の必要性である。正解を言うだけでなく、言葉の説明に加え実際に劇やデモンストレーションを行い、知識を身近に感じてもらうなどの工夫もしなくてはならないという反省があった。

3 つ目はクイズだけでは不十分であり、事前事後学習の必要性である。知識をしっかりと身につけるためには、予習・復習のプロセスも重要である。クイズを出題する前に、予備学習を行い、学んで、解いて、ということを繰り返す方法が効果的ではないかと思われる。金融被害の事例などを話すことによって、知識を身につけることの大切さをより実感してもらってから、学習するという順番にしても良かったのではないかと思った。

最後に、どの問題が出来てどの問題が出来なかったのかをしっかり調べるのをおろそかにしてしまったのが最大の反省点である。今回はこのことを行わなかったため、どの問題が難しく、どの問題が簡単だったのかが曖昧になってしまった。次回に実施する場合には、問題の正答率を調べて高齢者の金融教育に役立てる事が大切である。

おわりに

1．小冊子作製においては、「地域情報を学生視点で発見・発信」という主旨のもとに企画立案したが、なかなか取材対象が決まらなかったり、グループワークが機能しにくいという側面があった。事前の情報収集というプロセスで、ゼミ生たちの消極性が目立った。もっと貪欲に学外で足を使った情報収取を行う必要があったが、締切に追われて妥協したチームがいくつかあったことは非常に残念だった。若さに基づく好奇心を期待したが、最近の若者は大人が考えるよりも冷めているのかもしれない。

2．高齢者の金融教育実践については、当初より、実践結果を論文にまとめて日銀グランプリに応募する計画であったため、2 年次の前期に金融知識を学び、夏休みに実施するというタイトなものになった。さらに、学外で高齢者に金融知識を学んでもらうというプロジェクトは、初めての試みとしての活動であり、反省点は多かった。しかし、参加して下さった高齢者の皆さんには大変喜んでいただき、金沢市地域包括センター、白山市社会福祉協議会の両担当者共に今後も是非このような機会を設けて欲しいと要請された。学生のアクティブ・ラーニングと、大学の地域連携は様々な形で実現できるものであり、双方にとってメリットが大きいものであることを実感した。

短期大学の学生にとっては、学外への論文投稿はハードルが高いかと思われたが、事前に良く研究調査を行った点と、実施報告の貴重なデータがあるため短期間でも比較的充実した内容の論文として仕上がり、日銀グランプリの学生論文募集に応募した。結果は、佳作となり本選に進むことは出来なかったが、全国からの応募 109 校のうち唯一の短期大学であり、本選出場の上位 5 校に次ぐ佳作 8 校の中に入れたことは快挙であった。その後、神戸の流通科学大学で行った 3 大学 1 短大の合同ゼミ発表会でも、この活動報告を行い、評価されたことで学生たちは大きな自信を持ったようである。

また短期大学の限られた時間、カリキュラムの中でもアクティブ・ラーニングという手法で、ここまでの活動が出来ると内外に示せたことは、担当教員にとっても大変誇りに思える結果で、学生たちに感謝したい。今後も、プレゼミナール、ゼミナールの授業と、「地域を見直す・貢献する」という視点での地域連携とを両立させ、「星短発、学外へ」という発信作業を手段にして、学生たち各々の成長を促す活動を行って行きたい。